

看護業務における違反に関する一考察

安達 悠子

本研究は、看護業務におけるヒューマンエラーや事故の発生防止に資するため、看護師を対象として観察調査、違反に関する質問紙調査、危険認知に関する実験の3つの調査、実験を実施し、主に危険源の検出能力について、経験年数の観点から検討した。

観察調査の目的は、実際の看護業務の実態を把握することであった。30秒スナプリーディング法を用いて業務内容および業務量の分析を行い、越河（1987）との比較を行った。その結果、本観察対象とした業務は、越河（1987）と同様に「報告・連絡・情報交換」「書類の記録・点検」が多くの割合を占める一方、「診療の介助」の占める割合が高いという特徴が確認された。さらに「診療の介助」の内容を分析したところ、重篤高齢者の介助が多く、病棟の特徴に依存していた。

質問紙調査の目的は、危険認知に関する実験に使用する実験刺激作成のための違反事例の収集とその内容分析であった。質問紙では、看護業務中に自分または他人が行なった違反に関する内容について主に自由記述により回答を求めた。収集した212件の違反事例は、KJ法により分類した。そして収集数の多かった分類項目の内容を基にして、実験に用いる刺激を作成した。

危険認知に関する実験では、①看護業務従事者において危険源の検出能力は経験年数と関係するか、②経験年数によって違いがあればそれはどのような種類の危険であるかの2点について検討した。実験参加者は看護業務の経験年数から、新人群（1年以下）、中堅群（4～6年）、ベテラン群（15年以上）の3群に区分した。実験では複数の危険源を含む看護業務中の写真を提示し、実験者が設定した質問文に回答させる形式で実施した。危険の発見能力は、広義での危険感受性すなわち、危険感受度（場面に含まれる危険状況をどのように評価したか。どの程度危険と感じているかの度合い）、危険認知度（各場面で示される危険状態や状況に含まれる危険源について、どの程度的確に認知・把握しているかの程度）、行動準備性（危険源を回避するためにどのように行動しようとするか）の3測度から測定した。実験では、これらの3測度に加え、危険想起数（認知・把握した危険源から想起する危険の数）も測り、分析に用いた。

目的①に関しては、危険感受度、危険認知度は、統計的に有意な差は見られなかったものの、ほぼすべての測度においてベテラン群は高い値を示し、作業経験が増加すると危険感受性が増加するという一般的知見と同様の結果が得られた。ただし、新人群においても比較的高い値が得られており、看護師は専門教育の影響から経験が少なくても高い水準の危険の発見能力を持っていた可能性が考えられた。

目的②に関しては、新人群は用意した危険源のうち、違反項目に関して危険認知度が優れていた。新人群は行動準備性も良好な結果が得られており、違反に対する感受性の高さが、安全な行動の選択につながったと考えられる。

一方、危険想起数以外では全体に中堅群は低い値を示した。もし、単純に作業経験が増すことにより危険感受性も増加するのであれば、ベテラン群が最も高く、中堅群、新人群の順になるはずである。しかし、中堅群の危険感受度、行動準備性の値や、ベテラン群の行動準備性の値は低く、この結果は、作業経験は危険検出能力だけではなく、安全意識（この場合は負の影響）とも関わりが深いことを示唆している。今後は、看護業務中の実行動と安全意識の関係について更に検討することが課題である。